

「近づく解放の時」(ルカ二一章二五〜三三節)

1 主よ、来てください

アドベント(待降節)に入って、今日は二番目の日曜日です。アドベントが到来という意味をもっていて、キリストの二つの到来のことが考えられているということは先週も申し上げたとおりです。

二つの到来とは、一つは、神の子イエス・キリストが人として世に來られたということ、すなわち、クリスマスと、もう一つは、いま天にあつて神の右に座し私どものために執り成しておられるキリストがもう一度地上に來られる、第二の來臨、すなわち再臨、この二つです。その意味に忠じて、この時期、私どもは、何よりも喜びをもって、またお迎えするのにふさわしい悔い改めをもって過ごす、待つ、それがこのアドベントの時です。

この二つの來來のうち、ごくふつうの私どもの人間的な感覚からすれば、第二の來臨(再臨)に対してはいろいろの思いが交錯しています。一方でそれは本当のことなのだろうかという思いがあります。他方で、悲惨な戦争がたえなかった、またたえない世界、無意味で理不尽な人殺しもたえず、いまもあちこちで起こっている世界、私どもの日常の生活の中にまで押し入っている争いごとや対立。弱い立場の人の抑圧や差別、人を出し抜く欺瞞や偽善、こうした世界に、早く決着をつけてほしいという思いもつよくあります。それゆえイエス・キリストは本当にいつ來られるのだろうかという切なる思いがあります。

じつは同じような思いを、イエス・キリストがお生まれになる前、ユダヤの人びとももっていたのです。お生まれになる前、というより、それまで長い間ずっともちつづけていたのです。

福音書をあちこち見てみると、少なくともメシアへの期待がみんなに共通して大きかったことは明らかです。もちろんその期待度というか、どういう意味で期待しているかという点では様々でしたが、どんな人もメシアの來來については知っていたし何らかの思いをもっていたのです。

たとえばヘロデです。イエスが生まれたときその地を支配していた王様です。有名なクリスマス物語の一つ、東方から三人の博士がユダヤに王様が生まれたと聞いて來たといつてヘロデのところに行きます。ヘロデはびつくりです。だって自分が王なのですから。そして聖書に詳しい人びとを集めて、メシアがどこで生まれることになつているか調べてくれと命じます。ヘロデにとってメシアの來來は心穩やかでない不吉な知らせでした。

しかし民衆にとつてメシアへの期待は大きいものがありました。民衆はメシアを待ち望んでいて、洗礼者ヨハネについて、もしかしたら彼がそうではないかとみな心の中で考えていたという記事もありますし(ルカ三・一五)、ヨハネによる福音書に登場する一人のサマリヤの女性、彼女はイエスとの会話の中で、「わたしは・・・メシ

アが来られることは知っています。その方が来られるとき、わたしたちに一切のことを知らせてくださいます」(四・二五)と言っています。その時すべてが分かる、合点がいくのだと言っています。メシアを待望することは、彼女には、それゆえ切なるものがあつたのです。

もう一組上げておくべきでしょうか。イエスを十字架につけた指導者たちです。祭司長、ファリサイ派や律法学者、ヘロデ派の人びとです。イエスをメシアだという人びとを彼らはユダヤ教から、ということはその社会そのものから抹殺しようとしたのです(ヨハネ九・一二)。

かくて彼らはみなメシアの到来のことを考えていた。イザヤが「見よ、おとめが身ごもつて、男の子を産み、その名をインマヌエルと呼ぶ」(七・一四)と語ってからでも七百年以上経過していました。それは長い時間でありました。多くの人が、待つて、待つて、なお待望しながら亡くなっていった。望みながら、自分の目でそれを見ずして死んでいった。そして長い時間が経過した。そうした中でイエスが生まれたのです。それは神が約束を反故にされることはなかったということです。ご自分の約束を忠実に果たされたのです。そのことを考えれば、つまりイエスの第一の来臨が約束の実現であつたとすれば、第一の来臨、クリスマスの出来事は、第二の来臨を私どもに確信させてくれるといつてよいのではないのでしょうか。第二の来臨も見ずして信じてよいのではないのでしょうか。

2 人の子(キリスト)の来臨

さて今日の聖書箇所は第二の来臨に関わる箇所です。そしてここにはまさにその中心の出来事として、人の子、すなわち、イエス・キリストのことですが、その来臨が語られているのです。イエスが歴史の終わりについて語り出したきっかけを確かめておきます。

ある人たちが、神殿が見事な石と奉納物で飾られていることを話していると、イエスは言われた。「あなたがたはこれらの物に見とれているが、一つの石も崩されずに他の石の上に残ることのない日が来る」(二一・五〜六)。

「ある人たち」とは、マタイで「弟子たち」、マルコで「弟子たちの一人」となっています。いずれにせよ、弟子たちです。

弟子たちとはいえ、見事な石と奉納物で飾られた神殿に見とれるのは、あるいは無理もないことだったかも知れません。というのもエルサレム神殿はヘロデ王の代になって増築され、このとき規模においてかつての二倍の、きわめて壮麗な神殿へと変貌していたからです。

彼らは見とれています。すっかり魅せられています。神殿の見事な石や壮麗さに心奪われています。その彼らに対しイエスは「あなたがたはこれらの物に見とれているが、一つの石も崩されずに他の石の上に残ることのない日が来る(であろう)」と言

います。

この神殿がなくなってしまおうって？ 弟子たちはまことにいぶかしく思ったに違いないありません。

しかしイエスは言います。君たちは「物」に見とれている。見えるものに心を奪われている。かく言うイエスの目には、むしろ神殿の崩壊が見えていました。見えるものは人の造ったものです。人の造ったものは、たとえそれが神殿であっても、どれほど揺るぎないものと見えようともみな崩れさってしまうであろう。エルサレム神殿の崩壊がイエスには見えていた。

そしてエルサレム神殿の崩壊は、たんに神殿の崩壊ではない。イエスにとってそれは世の終わりの始まりの徴にすぎませんでした。イエスがその先に見ていたのは世の終わりでした。

それから、太陽と月と星に徴が現れる。地上では海がどよめき荒れ狂うので、諸国の民は、なすすべを知らず、不安に陥る。・・・天体が揺り動かされるからである。そのとき、人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗ってくるのを、人々は見ると見る（二五〜二七節）。

天と地に異変が生じるというのです。世の終わりが旧約聖書の言葉と表象を使って描写されています。天では神の創造になる天体が揺り動かされる。地でも、諸国の人はだれもがなすすべを知らず、それだけで息絶えたと語られています。しかしまさにそのときイエス・キリストは来られるのです。

私どもはすでに、アドベントに先立つ何回かの日曜日に、聖書から世の終わりについて聞いてきました。そこで学んだことは、聖書の世の終わりの描写は終末に至る日程表を示しているのではない。そうではなくて、そうした苦悶の中でこそ忍耐して、最後の救いを待ち望むように人々を励まし、勇気づけることにあるということを私どもは学んできたのです。その中心にあるのは人の子、救い主キリストの第二の来臨です。

3 仰ぎて首^{こころ}を挙げよ

このイエス・キリストの第二の来臨の時は、しかし私どもが、あのイエスのエルサレム入城を人々が歓呼して迎えたように迎える時です。それは裁きの時ではなく、救いの時だからです。

人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗ってくるのを、人々は見ると。このようなことが起こり始めたら、身を起こして頭を上げなさい。あなたがたの解放の時が近いからだ（二七〜二八節）。

この聖句の最後のところ、「解放の時が近いから」という中の「解放」と訳されている

のは、同じこの福音書では、「救い」とも「贖い」とも訳されています。その意味は私どもの全部がそのまま神に受け入れられるということです。「神の国」(三二節)に受け入れられる、神が私どもの神となつてくださり私どもが神の民となるということです。その時が近いということです。

これらの諸節で私どもの注意がもっとも引きつけられるのは「身を起こして頭を上げなさい」という命令の言葉です。私はこの聖句が今度の聖書を読みながら、一番心に残りました。

「身を起こして」という言葉は、他のところで、同じルカですが、一八年間も病気で腰が曲がったまま伸ばせなかつた女性が、いやされて「腰がまっすぐになつた」というところで使われています(一三・一三)。腰と背をしゃんと伸ばして、首(こうべ)を上げて、迎えるということです。うなだれてはならない。下を向いてはならない。私どもの救いが近づいているのです。

近づいている？ その通りです。しかしキリストの第二の来臨、それはまさか明日ではないでしょう！ 今週はないね、という話ではないのです。私どもはいつキリストが来られてもよいように、「身を起こし頭を上げて」歩みたいのです。

この時代、いまの世界や日本の状況を見ると、まことに暗澹たる思いにかられるのは私だけではないでしょう。何とかファーストばかり。自分の利益のみを考えることで、人のことなどどうでもいい。欺瞞が横行し、理性と人間の知性にもとづいた社会の形成がなされようとしているのか疑問です。軍事費だけが伸びてその陰で貧困が広がっています。

そうした中で最近、ドイツのアンゲラ・メルケル首相の書いた『わたしの信仰 キリスト者として行動する』(新教出版社)を読み、感銘を受けたところです。信仰と政治を一緒くたにはできませんが、彼女のスピーチの背後にはキリスト教信仰が息づいていて、そこに立って、知性をつくしこの世の諸問題を考えようとしていることに強い印象を受けました。彼女の考えの要諦は、人は神によって造られたものとして一人一人不可侵の尊厳をもっており、したがってそれが尊重され、共に生きる、共に生きられる社会を形成するべく務めることと私は理解しました。それはむしろキリスト教信仰を背景にしつつ、それだけではなく、もっと普遍的な意味をもった考え方だと思います。

キリストの第二の来臨を思つて生きるということとは、この世のことがどうでもよくなることではありません。現状をよいものに変えようとする情熱を捨ててしまうことでもありません。むしろ私どもの社会は、やがて来る神の国をこの地上において映し出すものでなければならぬのです。そのために知恵をつくして互いに努力することをしたいのです。

「しかり、わたしはすぐに来る。アーメン、主イエスよ、来てください」(黙示録二二・二〇)。終末を見すえたこの信仰と希望に固く立ち、教会生活を大切にし、共に豊かに生きる社会を目指して歩みたいと思います。

(二〇一八年二月九日)